

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報

第10号



事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL&FAX. 0423-27-2890



草の根のLD学習会

国立療養所西鳥取病院 副院長

吉野邦夫

川村秀忠氏は旧版の「学習障害—その発見と取り組み」(慶応通信、1977)で1967年以來のわが国のLD研究の流れを解説し、また研究においても、治療教育の実践においても、教育—医療—心理などの新しい結合とチームアプローチの必要性を説いた。爾來、多年を経てさまざまな研究や実践が蓄積され、また親の会や学会の発足など、十分とは言えないが広がりや結合の発展をみたことは喜ばしいことである。

当地でも、LDリスク幼児の感覚運動やソーシャルコンピテンスを高める取り組みを地域の保母さんがしたり、LD児のサークル活動や親の会活動、教育と療育関係者のLD研究会といった活動が細々ながらも続いている。LDという名称だけは市民権を得たが、行政的な裏づけや援助は皆無なので、まことにささやかな草の根活動である。

こうした草の根の活動は手作りの楽しさがある反面、なかなか維持運営が容易ではない。マスコミが騒ぐ時には参加者や協力者が多いが、引き潮のごとく減退するとか、リーダーの転勤や交替で

活動レベルが変わったりで、とくに田舎の人口が少ない所では大変である。教師もまたきわめて多忙であったり、中には困った時には興味を示しても喉元過ぎれば無関係というタイプや、ひとりで参考書から知識、技術を得ようとする独学派、少しかじるともう分かったという即席ラーメン派もあるようで、息の長い集団活動はやりにくい。

だが、困難だからこそ逆に大切なものも見えやすい。私がこの草の根の活動から学んだことは、①LDの治療教育や子育ての大切な要点は、基本的に実践の中で人から人へ手渡しでないと伝えにくい、②親にせよ療育者にせよ、大人の方が自己覚知、自己変容をころがげないと子どもも見かけ上の発達に終わる、という点である。その意味では、草の根活動で親や療育者が息の長い学習を続けていくことが肝要であろう。

LD児は、単に教育技術や神経学的知見だけではなく、地域社会の教育のあり方、人間のあり方を問いかけている。その地域の特性にあった根強いチームを作りたいものである。